

ノーベル賞と大学

10月7日にノーベル物理学賞に赤崎勇・中村修二・天野浩の3氏の受賞が発表され、とりわけ名古屋、名大が沸いている。世界の人々の生活を変え、新しい産業創出につながったことが高く評価された。赤崎さんが名大教授時代に青色に光る発光ダイオード(LED)の開発に成功し、弟子である現職の名大教授である天野さんと一緒に受賞した。これで名大のノーベル賞受賞者は6人になる。

写真下が8日午前、名大「赤崎記念研究館」前の受賞お祝いの「セレモニー」である。よく利用する北部生協食堂の前にあり、昼食前を通りかかった時に撮ったものだ。鞆に入れていたiPadを取り出し、急ぎよ撮った。ここでも「iPad効果?」なるものを感じた。

「お祝いの垂れ幕」を背にして、学長らが多くの報道陣の前で取材に応じていた。食堂に来た大勢の学生・教職員も、立ち止まって様子を眺めていた。

写真の上は、翌日に名大生協で買った「キーライト」だ。文房具を買うために生協に入ったが、「LEDグッズ」特設のコーナーがあった。物珍しさもあり、つい「キーライト」を買ってしまった。確かに、良く光って暗い所、災害時には便利で大切な「グッズ」である。

その日の朝日夕刊を見ると、「キーライト」は1日で50個売れたという。ガラスを置くと光るコースターは品切れであった。約10年前から販売しているが、半年で20個売れる程度だったという。まさに受賞記念「LEDグッズ人気」だ。

その日の朝日夕刊を見ると、「キーライト」は1日で50個売れたという。ガラスを置くと光るコースターは品切れであった。約10年前から販売しているが、半年で20個売れる程度だったという。まさに受賞記念「LEDグッズ人気」だ。

ノーベル賞というと、6年前のことを思い出す。2008年に小林誠・益川敏英の両氏が物理学賞、下村修氏が化学賞を同時に受賞した。この時も「名大理系・ノーベル賞」が話題になった。名大はその後、理系を中心に研究棟などが次々に建設され、今も道路沿いに大きな建物を建設中である。退職した名市大では、古い校舎を建て替えることが予算的にいかに困難であるかを痛感してきたので、名大の現状を見るにつけ複雑な気持ちになる。

2009年2月3日レポートに次のように書いていた。前年12月29日中日新聞1面に、「理学部新設 名市大が構想」と大きく報じた。ノーベル賞「人気」にあやかった記事のようだが、わが「ふるさと」人文社会学部のことも書かれており、中日新聞「発言」に投稿した。残念ながら採用されなかったが、ついレポートを読み返した。

(2014年10月11日)

